

お墓の歴史について

29期生

I テーマ設定の理由

墓とは不思議なものである。私達とは切っても切れない深い間柄にあるのに、その過去を私達は殆ど知らない。箸や茶碗みたいなものである。

この研究をはじめたのは昨年であるが、今思い返すと墓の持つこんな神秘さが半分と、自由研究だという義務感が半分であったと思うが、かんじんの、なぜ墓という変なものを思いついたかは今も謎である。

今年は、昨年やり残したことをやり終えたいという気持ちが6分の1と、最後の年だから何か充実したものをやりたいという気持ちが3分の1と、新たに1からやり直すのは面倒臭いという気持ちが2分の1で再びこのテーマを採った。

II 研究方法

テーマ設定の理由が理由であるから、当初は文献に全面的に頼ろうと思っていたが、頼みの文献が見つからず、考えた末幾ヶ所かの墓地を巡って実施にデータを集め、それを分析して墓の形の推移について自分なりの解釈を加えることにした。

何しろ文献が皆無だったため、昨年はデータ収集とその整理までがやっとだった。

今年は全体の流れは既につかんであったので主目的を分析と考察に置き、自分なりの見解をまとめる傍ら、文献の発見に努めてできるだけ関係史料を集めて考察の助けとした。

☆参考文献：「よい墓・悪い墓」 中山聖山著、「アポロ百科事典」 平凡社

III 研究結果

(1) 墓地調査の結果

墓の調査は、奈良市二名町にある墓地と近鉄石切駅下車徒歩7分の墓地の2ヶ所で、

- ①墓の建立された年代
- ②墓石の形
- ③墓石の高さ

の3項目について行なった。

調査総数549基の内、僧侶、幼児、外国式、木製、及び自然石などによってつくられている特殊な墓はサンプル不足のため研究対象から除外し、又高さについては、各種類共年代による変化はみられなかったため各種類毎の傾向として記録するにとどめ、研究項目から一応除いた。こうして残ったのは8種類、486基の墓と課題2項目であった。

又、後でこれら8種類の墓石はどれも角石形と呼ばれるものだと判明し、結局、研究は角石形墓における年代による形式の推移ということにしほられたのであった。

これらの8種類の墓石の、15年間を1区切りとする各年代の総建立墓石数に対する割合を示したのが表1で、それを模式化したのが図1、そして図2は各型の特徴を示したものである。

	M以前	M1~15	M16~30	M31~45	T1~15	S1~15	S16~30	S30~45	S46~
①型	47	54	9	33	13	1	1	0	0
②型	46	38	67	42	27	17	9	3	0
③型	0	0	0	0	4	28	22	36	3
④型	0	0	8	0	5	7	9	8	6
⑤型	5	0	8	15	14	8	0	0	0
⑥型	0	0	8	9	27	17	2	0	3
⑦型	0	0	0	0	4	6	40	5	0
⑧型	2	8	0	0	6	16	17	47	88
墓石数	72基	13基	12基	33基	56基	71基	85基	115基	29基

—表1—

(数値は%)

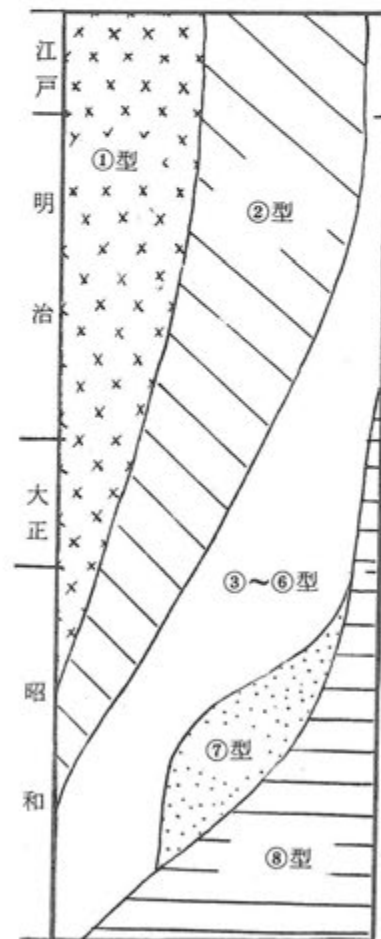


図1.

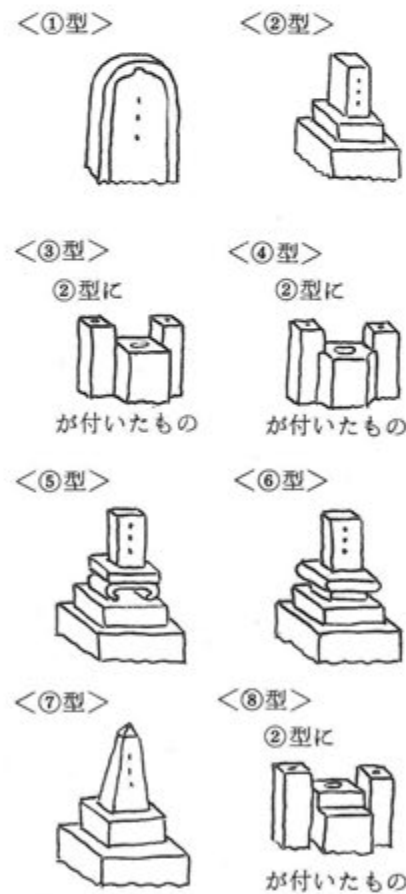


図2.

[2] 考察のまとめ - 角石形墓の歴史 -

(1) 角石形墓……その江戸時代……

『現在普通に見られるお墓（角石形墓）が一般に普及しだしたのは江戸時代も中期になってからだ』と言えば、「へえ、そんなものか。もっと古いと思っていた」と思われる人も多いことと思う。実際、現在の角石形墓の普及は江戸中期以降であった。

江戸初期まで、人口の大部分を占める町人及び農民の墓の建立は、「墓石制限令」というものによって制限されていたのであった。もちろんこれは時の権力者達によって出された法令であり、それらの人々は自由に墓を建てることができたわけである。

しかし、この法令も時を経るにつれて弛緩し、江戸時代も末期になると豪農富商らかなり高級な墓を建立したのをはじめ、町人及び農民階級の墓の建立が多くなり、天保2年（1831年）には当時の寺社奉行、松平信順、堀親宝が、墓の建立そのものの制限はしなかったが、「百姓町人の院号、居士号の禁止並びに墓石の大きさの制限」を触れた程であった。

江戸期の墓は殆ど①型と②型であるが、図2を見ればわかるようにどちらも非常に単純で、前述の墓石制限令の影響が大であると思われる。しかし、単純は単純でも①型の方が②型より更に単純である。①型は墓石をつくる石が1個であるのに対し、②型のそれは3個であり、又調査結果のところでは記さなかったが、双方の高さも①型がひざぐらいなのに対して②型は腰ぐらいまでであった。この相違はどこからきたのだろうか。

これは全くの推測であるが、まず、調査を行なった墓地はいずれも所在地から考えて当時は農村部にあったと思われる。又江戸時代の農民は自作農と小作農に分かれていたこともわかっている。このことから、①型は小作農の、②型は自作農の墓ではないかと思う。小作農に比べて多少とも富裕な自作農は、より立派な墓を建てたのではないだろうか。

(2) 角石形墓……その明治時代以後……

明治時代になって、封建社会は終わりを告げ、四民平等が叫ばれ、墓石制限令も廃止されて人々は思い思いの墓を建てることできるようになった。関西では阿部野墓地がその初期からの様子を今に伝えているそうである。

明治以後、現在に至る推移は、図1をみてわかるように急激とも言える程である。明治初期は江戸時代と同様に①型及び②型が大部分を占めていたが、昭和も46年以後となると、かわって③型が9割弱も占めるようになってきた。この変化を順を追って追ってみよう。

明治時代になったからといって、百姓町人の経済事情が急に变化したわけでもなかったし、文明開化だからといって江戸時代までの慣習が急に捨てられたわけでもなかった。まして墓という宗教的なものこと、維新後、日の浅い明治時代において江戸時代と同様に①型と②型が大勢を占めたのは、当然といえば当然であったと思う。

その明治時代も後期になると、③～⑥型という新しいスタイルの墓がみられるようになってきた。ところで、なぜこの4つのスタイルを1まとめにしたかという点、②型の墓石の形を多少変えたり、花台とか供物置をつけたのがこれら4つのスタイルであり、②型をモデルチェンジした、いわば「②型改」としてまとめた方がよいと思

たからである。

かくして、在来型である①型及び②型と、②型をモデルチェンジした③～⑥型が群雄割拠する墓形の戦国時代がこれより大正を経て昭和40年代まで続くのである。

この戦国時代を統一したのは⑧型である。⑧型も基本的にはオリジナルを②型にしているが、③～⑥型と一緒にしなかったのは、この急激な伸びからみて③～⑥型とはどこか違うのではないかと思ったからであるが、はっきりとはわからない。

ここで問題になるのは、どうして⑧型に統一されたかということである。なぜ1つのスタイルになる必要があったか、又なぜそれが⑧型になったのか、それが問題なのである。

日本の戦後の高度経済成長は、大量生産の時代であった。大量生産は生産コストの低下となり、利潤の増大につながる。そこで墓形もどれか1スタイルにしばられたのではないかと思う。又、この⑧型というのは、花台と供物台が③、④型と違って分離し複雑になって、一見高級そうで、又墓相学上も⑤型や⑥型よりも問題が少ないということがあり、これらの理由で⑧型による統一となったと考えられる。

最後に⑦型について触れておきたいと思う。⑦型も③型をモデルチェンジしたものであるが、これを別にしたのは角石形墓石の推移とは無関係な特殊なスタイルだからである。というのは、これは軍人の墓なのである。戦争という事件によって生まれた特異な性格をもつ墓形であるといえる。

IV 結 論

- (1) 角石形墓は江戸中期から普及ししたが、江戸時代の間は墓石制限令という法令に縛られてごく単純なものしか建てられなかった。
- (2) 明治になって墓石制限令がなくなると徐々に発展した形の墓形が登場し、昭和20年代まで、それらの入り混じる期間が続いた。
- (3) 昭和の30年代頃から、角石形墓は次第に⑧型に統一され、現在では新規建立墓数の約9割をその型が占めている。

V 総 括

何よりもまず、資料の貧弱さが第一の反省点だと思う。もっと参考文献を探すべきであった。考察の根拠が薄く、多分に、良く言えば独創的、悪く言えば一人合点になった。それとデータの収集に問題があったのではないかというのが第2の反省点である。1つの墓地にしぼってその地域の歴史との関連をみたら、もっと面白かったと思う。今回は墓地が2ヶ所と、この課題をやるにもやれず、かといって日本の角石形墓とするにはあまりにも少数な、中途半端な研究となってしまった。

研究は、多分に僕の無気力も手伝って、以上のようにあまり自慢できるものにはならなかったが、この研究をやって改めて「どんなものにも歴史がある」ことを感じた。日常忙しくて目につかないものでも、それにはその歴史があり、どんな些細なものでも、その歴史は自分の人生よりも遙かに長いのである。そしてそのことを感じた僕はこの研究をやってよかったと思った。